

地域での世代間交流「学びの場」の創出

—商店街を活用した「タイムマシン・クッキング」の実践—

藪田 里美

1. はじめに

社会構造の変化、情報の氾濫などにより、価値観の多様化が急速に進んでいると言われる現代、安易な個人主義が助長し、むしろ多様性が認められなくなる危険性ははらんでいる。とりわけ少子化、核家族化、いじめ、虐待など、地域社会における環境は変化し、子どもたちをめぐる課題は年々深刻化を増している。その背景として、他者を思いやる、信じる、コミュニケーションする、これら社会の中で生きるために必要な力、つまり社会力（例えば、門脇，1999）が未成熟であることが指摘されている。

そこで、大人も他者との関係に迷い、不安を感じる時代、子どもたちにとっての地域社会での「学びの場」を、保護者やそれ以外の人を含め、世代間で交流できる機会として創出した。具体的には、同志社大学の地域コミュニティの拠点「でまち家」¹にて、出町商店街振興組合²および各種団体の共催のもと、標記の取り組みを実施した。ソーシャル・イノベーション研究コースにおける社会実験の中間報告として、本稿にて報告する。

2. 企画から実施まで

「タイムマシン・クッキング」は、昭和30年代前後を想定し、その当時の商店街での買物体験及び調理体験を実施する取り組みであった³。あえて「便利さから脱却する」、「不便さを楽しむ」ことで、当時を知る人には懐かしく、知らない人にとっては何かを感じ取る機会になると考えたのである。

それぞれにとっての意義は、次のようなものがあると考えた。まず、大人たちは子どもたちに知識を伝承することで、仕事のやりがい、生きがいなど、日々の暮らしの意味を再確認する。各店舗は、普段スーパーで買物する方々への対面販売を通じて、商店街のファンを増やす機会とする。

参加対象は京都市広域の小学生とその保護者とした。みやこ土曜塾⁴に位置づけることで幅広く参加者を募ることにしたため、でまち家での閑散期である3月に実施した。定員は15名だったが、広く関心を集め、参加者は抽選となった。

協力店舗には事前に趣旨を説明し理解を得た。昔ながらのお買い物体験ゆえに、以前の秤を準備し、竹皮での豚肉包装なども快く受け入れられた。その際には買い物時に当時の話を盛り込むなどの依頼も重ねた。

なお、参加者には感想交流の時間を最後に設

¹ 大学が町家を借り、学生・地域と連動しながら活動を行う。大学と学生が運営する町家では、「子ども」「学生」「大人」「高齢者」が出入りし、世代混合のサークル活動や議論の場が展開されている。地域に関与し、地域に関与された学生生活をおくることで、ライフスキルを高めることを期待するプログラムである。

² 出町商店街振興組合のある出町界隈は、京都市上京区の北東部に位置し、福井県の小浜から京都へと続く鯖街道の終点として、古くから海産物の集まる場所であり、現在も地域の台所として愛されている。

³ 携帯も、パソコンも、テレビもなかった時代、コミュニケーションを真面目にしていた時代に、一瞬タイムスリップするといふものだ。そうして物質的ではない豊かさとは何かを問いかけた。

⁴ 「大人みんなが先生に」を合言葉に、また「まち全体を学びと育ちの場に」を目標に、土曜日をはじめ学校休業日に京都ならではの多様な学習資源を生かしたさまざまな学びの場を提供し、子どもたちを育んでいこうという市民ぐるみの取り組みである。

表1 当日のスケジュール

時 間	ス ケ ジ ュ ー ル
10:00	受付（1階） 挨拶、スケジュール説明など（2階）
10:30	出町商店街へ買物体験
11:00	調理（豚汁野菜カット）、ダシとり、鰹節削り、薪ストーブでご飯炊き（1階）
12:40	昼食（2階）
13:30	感想交流 アンケート記入（2階）
14:00	挨拶後、終了

定した。また、子ども用、保護者用、スタッフ用アンケートを配布し、意識変化、活動成果、反省点が検討できるようにした。

3. 当日の概要

2010年3月13日（土）は、天候の怪しい朝であった。9時40分過ぎには、子どもたちが次々とでまち家にやってきた⁵。そして、ほぼ定刻に開始し、子ども16名、保護者7名、スタッフ18名、総勢41名が、表1の流れでタイムマシンに乗ることになった。

商店街には3班に分かれ、豆腐を入れる鍋やボール、買い物袋の風呂敷を片手に、買い物体験に出かけた。各店舗の店主は「待ってました」とばかりに笑顔で迎えた。そして、味噌・漬物の量り売り、豆腐・油揚げの作り方の説明、目の前で子どもの背丈以上である1メートル以上の昆布を量り売りするなど、対話しながらの買い物が進められた。子どもも大人も興味津々であった。店主の「おまけしとくわな」の言葉に、子どもは「こんなん（スーパーでは）してもらえへんなあ」と返していた。その雰囲気は、身体的な距離にも影響を与えた。最初は母親にベッタリとついていた子どもも、帰路時には他の子どもと意気投合して戻って来た。関わり合いの中で、互いのルールも決められていたようで、年少の子は軽い荷物を持ち帰ってきていた。

最も人気を得たのは鰹節削りだった。一列に並んだ子どもたちは、身を乗り出しながら出番を待つ。鰹節を握る手はぎこちなく、恐る恐る初挑戦。店主の助言で「シュ、シュ」と鈍い音と共に削り始め、コツをつかんだところで交代、保護者も「負けてられへん」とばかりに列に急ぐ。削る、待つ、双方が鰹節に向ける真剣な眼



図1 鰹節削りに挑戦（筆者撮影）



図2 薪ストーブでご飯炊き（筆者撮影）

差しから、好奇心が揺さぶられていることを垣間見た一瞬であった。

買い物の後は、薪ストーブでのご飯炊きであった。前日からの雨の影響からか、薪には中々火が熾らなかった。ただ、自宅が薪のお風呂の子が、パタパタと手際よくウチワで火を熾した。薪で炊いたごはんは、おひつに移され、全員が2階で「いただきます」をした、文字通り「同

⁵ 開始まではアイスブレイクの時間とした。初対面の雰囲気也和んだように見えた。

じ釜の飯」を食べた。昆布をふんだんに使用した豚汁が、何杯もおかわりされたのが印象的だった。

最後に行った感想交流は、「みんなでごはんを食べて美味しかった」、「いつものごはんとは違って堅かった」、「昔のやり方は時間がかかったけど、その分お腹が空いてごはんが美味しかった」など、特に子どもたちからは多くの笑いが起こった。一方、保護者からは、「スタッフも楽しんでもらえて、それが子どもに伝わり皆が楽しめた」、「いつもはスーパーばかりだけど、良い体験ができた。日頃から商店街で買うこと自体が、大切な体験だと思う」、「他の小学校の子と友だちになれた」「お母さんベッタリな一人っ子が、今日は離れて楽しそうだった」、「日頃は忙しくて包丁を使わせてないけど、ごぼうのさがきを上手にしているのを見て、びっくりした」、「商店街がないまちで暮らしているの、今日は良い体験ができた」など、日常の生活とを対比した感想が寄せられた⁶。

4. 成果と展望

前節に記したとおり、この取り組みでは非日常の空間を創出したことで、日常生活の見つめ直しの機会が得られた。参加者からの「スタッフも楽しんでもらえた」との感想からも、スタッフの役割分担は適切だったことが伺える。実は、事前にスタッフは打合せも含めた交流会を実施した。そして本番を経て、地域スタッフ、大学生スタッフそれぞれに、協働の意識が芽生えたと言えよう。

この「タイムマシン・クッキング」は、親子での参加により、家庭生活の中での新たな視点を導いたと感じている。なぜなら、後日いただいた保護者からの「あれ以来、出町商店街のファンとなり、しばしば通っております」という手紙も寄せられたためだ。転じて、商店街にとっては、地域外の人々とのコミュニケーションにより、継続的に自らの仕事への誇りを確認することも可能となろう。

何より、地域のステキな人に子どもたちは真摯に耳を傾けることは明らかであった。そして、地域の協力を通じて、人と人とのあいだで、子

どもたちは社会で生きていくために必要な知識や技術を広く身につける機会を得る。もちろん、今回のようなイベントの機会だけでなく、日常的な他者との関わりから、豊かなコミュニケーション能力が育つことを期待する。

なお、この「タイムマシン・クッキング」の取り組みは、世代間交流の場にとどまらず、商店街協力を得ながら広く展開され、地域外からも参加を可能とし、地域コミュニティ活性の一役を担えたと希望する。

参考文献

門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店、1999年

参考ウェブサイト：(2010年4月17日閲覧)

でまち.jp

<http://www.demachi.jp/contents/demachimall.html>

みやこ子ども土曜塾

<http://www.doyo-juku.com/about.html>

京都市観光案内

<http://www.kyoto-2.jp/kanko/demachimall.html>

同志社大学

http://www.doshisha.ac.jp/students/support2/machiya_project/

⁶ アンケートの自由記入欄に、野菜、お釜、薪ストーブ、鯉節などの絵を描いた子どもも少なくなかった。